




論文審査結果の要旨および担当者

|  |          |       |   |
|--|----------|-------|---|
| 報告番号   | ※甲第 24 号 | 氏名    | Buyanmandakh Buyankhishig   |
| 論文審査担当者  | 主査 教授    | 内田 龍児 |  |
|  | 副査 教授    | 吉村 祐一 |  |
|  | 副査 教授    | 佐々木健郎 |  |
| <p>(論文審査の要旨)</p> <p>本論文は、4種のモンゴル国薬用植物である <i>Oxytropis lanata</i>、<i>Brachanthemum gobicum</i>、<i>Calligonum mongolicum</i>、及び <i>Apocynum pictum</i> 含有成分の探索とその生物活性について検討したものであり、その中で総数17種類の新規化合物及び73種類の既知化合物を単離・精製し構造を決定した。さらに生物活性として家畜動物の病害において問題とされる原虫に対する抗原虫作用、及びそれぞれの本国における伝統医療における使用の根拠となる抗炎症作用などの薬理作用の一部を解明した。その内容は4報の学術論文として発表されている。</p> <p>第1章での緒論に続き、第2章では、<i>Oxytropis lanata</i>の地上部からオレアナン骨格を有する新規サポニン成分を単離しその構造を決定するとともに、ヒアルロニダーゼ活性に対する影響を検討し阻害活性を認めた。さらに、含有される新規オキサゾール類及び新規フラボン類は <i>Trypanosoma congolense</i> に対する抗原虫活性を示すことを明らかにしている。</p> <p>第3章では、<i>Brachanthemum gobicum</i>の地上部から <i>T. congolense</i> に対する抗原虫活性を示す化合物群の活性に立体選択性が存在することからそれらの絶対立体配置を決定している。</p> <p>第4章では、<i>Calligonum mongolicum</i>の地上部から phenoloxidas e に対する阻害活性を検討し、新規フェニルプロパノイド類にその阻害活性を認めている。</p> <p>第5章では、<i>Apocynum pictum</i>の地上部から新規セスキテルペン</p> |          |       |   |

骨格を有する化合物群を単離しその構造を決定している。

これらの知見は未知の有用薬用植物資源の探索における科学的根拠の付与及び天然物に由来する新薬のシーズの発見の観点から極めて興味深い。

以上、本論文は薬学における生薬学と天然物化学の領域に多くの新しい知見をもたらしており、博士の学位論文としてふさわしいと判断した。

